

危機を乗り越える

園長 児嶋 草次郎

A: 御無沙汰しています。「友愛通信」はいつも楽しみに拝読しています。今日は、コロナの件が気になり電話してみました。宮崎が急に増えて来ているみたいで、大丈夫ですか。

B: 御心配していただき、ありがとうございます。宮崎は、3か月弱ほど14名で推移していたのに、7月半ばをすぎた頃から増え始めて、今や235名(8月7日)です。高鍋町のスナックでクラスターが発生したとかで、この児湯郡地区も徐々に感染者が出て来て、我が木城町も現在5名です。特に保育園は、地域性があり日常的に保護者・子供たちが出入りしていますので、職員たちもピリピリしています。

A: 施設の方は大丈夫かい。保育園はいざとなったら閉園できるけど、児童養護施設は、逃げる場所がないよね。

B: はい。生活の場ですので、絶対にウィルスを侵入させるわけにはいきません。幸い夏休みに入っており、子供たちは出入りしませんし、職員も直接処遇職員はほとんど住み込んでいますので、外部との接触はありません。通いの職員には、通勤して来た時のマスクと園内でのマスクは交換してもらっていますし、体温もしっかり測ってもらっています。

それぞれ職員一人ひとりが自分の行動を自粛することで、侵入は防止できるのだと思います。私たちには、子供たちの命を守るという責任がありますので。

A: 子供たちもよく耐えているね。

B: はい、申し訳ないのは、保護者との面会も、盆帰省も、この8月はさせないことにしたことです。県こども家庭課からの指導もあり、この夏は、辛抱してもらうことにしました。今や、コロナウィルスは宮崎県全域に蔓延しているような状態であり、どこで感染するかわかりません。早くワクチンができるようにと祈る毎日です。

6月頃は、宮崎県の感染者は10人台でその感染源もつかめていて、収束したような感じでした。大都会で生活していた人たちを「同情する」などと偉そうなことを言っていたことを恥じています。

A: 第2波というやつだろうと思うよ。自分は大都会の人間だけど、100年に一度と言われるこの災害に対しては、じっと耐えるしかないね。それにしても恐ろしい感染症だ。感染者は世界で1800万人を越え、死者も70万人くらいになっている。特にアメリカが深刻な状況で感染者が500万人にせまる勢い。死者も16万人くらいにはなっている。アメリカの闇が一挙に露呈されたような感じだ。貧富の格差の上に国民皆保険制度がなかったりで、低所得者の人たちが医療機関に助けを求めることができず、じっと我慢して亡くなったり流行したりしている例が多いようだ。早く収束に向かわないと、デモや暴動がますます激しくなってくるね。

B: 日本の感染者は4万人台で死者は1000人台です。行政がアレコレ批判されるけど、アメリカ等に比べると奇跡的と言ってもよいくらい少ないですね。

A: 日本人が長い歴史の中で培ってきた生活文化・自律心のおかげだと思うよ。欧米のように、

「都市封鎖」というような強権的やり方ではなく、「自粛要請」だけで、日本人はしっかり自己コントロールしようとする。手洗い、うがい、マスク着用についても、粛々と守っている。ハグの習慣がないとか土足で家に上がらないなども、感染防止になっていると指摘もされているね。

B: 日々大変だけど、そういう世界的な視野の中で、自分たちの状況を見るという視点も大事ですね。今までなんでもかんでもグローバル化の名のもとに、欧米に合わせようとして来たけど、日本の生活文化を再評価すべき時なのかもしれませんね。グローバル化の流れにはストップがかかるのでしょうか。

A: 世界各国は、コロナ侵入防止のため、出入国を厳しく管理しているよね。日本には年間 3000 万人以上の観光客が来ていたのに、ほぼゼロとなった。ただ通信（情報）は、すでに世界は一つの状態であり、グローバル化は変わらないだろうね。しかし、このところ始まっている保護主義、例えばイギリスの EU 離脱やトランプ大統領の自国第一主義等の流れは、今後一層強まる可能性があるね。各国、保護主義が強まれば対立も深まっていくよね。貿易立国日本も舵取りが難しくなると思うよ。

B: ピンチはチャンスと言います。石井十次もコレラや赤痢などで危機に追いつめられたことがあります。ただじっと耐えるのではなく、何か転換の機会としないといけないと思います。天は我々にそのことを要求しているようにも感じているのですが、私たちのこの仕事において何か助言はありませんか。

A: もうすでに多くの人たちが仕事を失っている。特に日々の稼ぎで生活している人たちはジリジリと追いつめられている。大不況がやってくるという人もいる。一方国や行政は、「新しい生活様式」とか言ってコロナが過ぎ去った後も、色んな面で上から規制や制約を強めてくる可能性がある。

それこそ石井十次先生の「天は父なり 人は同胞なれば 互いに相信じ相愛すべきこと」の原点にもう一度立ってみるべき時だと思うよ。人はこの地球の単なる一生物でしかない。今まで色んな災難・災害の時は、みんなで力を合わせて乗り越えて来たわけだし、そのスタンスは変わるものではない。特に未来を担う子供たちの子育て・教育においては、放棄や手抜きをしないようにしなければならない。地域や家庭において落ちこぼれる子供が出ないように、今まで以上に児童福祉関係者は目配りしてほしいと思います。アメリカのように貧富の格差がさらに開いていかないように、年齢を越えて障がいの有無を越えて共生し合う時だと思うよ。

B: 分かりました。しっかりがんばります。

A: ところで、今日はもう一つ聞きたいことがあったのです。勇気を出して聞くことにします。7 月 8 日だったか新聞に 3 歳の娘を 8 日間マンションに放置し餓死させたということで、母親が逮捕されたというニュースが載っていたよね。こういう事件には、いつも心が痛むのだけれども、読み進めていったら、その母親の K 容疑者は宮崎県出身と書いてあった。さらに、たまたま本屋で買い求めた週刊誌には、宮崎県の児童養護施設に小学校から高校卒業時まで入所していたと書いてあった。その後の風の便りで、あなたの施設出身ではないらしいということは分かったけど、あなた自身はこの問題をどう分析しているのだろうか、すごく気になっていたのです。

B: 御心配をかけてすみません。昨年石井十次セミナーの時、2 歳女兒が 3 日間母親に放置され死亡した事件について「社会のセーフティーネットに引っかかることができなかった不幸な事件」と紹介しました。母親は「育児に疲れ一人になりたかった。知人男性宅や仕事に行ってい

た」と供述したと新聞は報じていました。今回の事件も同じような内容です。鹿児島県の知人男性に会いに行っていたようです。「子どもの面倒を見るのが大変で、リラックスしたかった」と供述していると、新聞（読売新聞7月9日付）は報じていました。その後、7月25日にも、乳児を16時間放置し死亡させ母親を逮捕したというニュースも報じられています。

A：私が気になるのは、その母親は凄絶な虐待を受けて施設に措置され、施設で生活したのに、その虐待が連鎖した、と週刊誌がとらえているところ。「悲劇の連鎖」と書いてあった（週刊新潮2020 7, 23）。施設関係者として、どう受け取っているのだろうか――。

B：私が一番恐れているのは、施設で育ったから連鎖を防止できなかったと、施設否定論に利用されることです。残念ながら家庭で育とうと里親宅で育とうと、施設で育とうと、こういう事件は起きる時にはおきてしまう。重要なのは、母子家庭になってしまった時、その母子を支援するシステムを確立することです。彼氏に会いに行くのであれば、子供をショートステイでもよいし、一時保護でもよい、一時施設等にあずければよかった。その知識がなかったということが一番反省すべきところだと思います。今回の母子は保育園を利用したこともあったようであり、保育園でそういう情報はしっかり伝えておかねばならないのでしょう。

また、この事件に限らないことですが、今の親世代以降は、ゲームで育っている。リセットボタンを押せば、すべての責任や関係・しがらみをチャラにできるというような感覚を持っているように感じます。今、友愛園で生活している子供たちの中にも、家でゲームに冒されていた子もいて、色んな事に対する対応に「アレ」と思うこともあります。そのリセットボタンがどこにあるのかわかりませんが、勝手に何かの拍子に気持ちが変わるのかも知れません。当然反省もなかなかできません。セーフティーネットの課題とゲームで養われた感性の問題という風に私は受けとっています。

A：明解な分析ありがとうございます。もしかしたら自信を喪失しているのではないかと心配していました。

B：この事件については、園の子供たちにも話しました。子供たちにも危機意識を持ってほしいからです。ここは貧困の連鎖を断ち運命を変えるための修行の場です。みんなが自覚し転換できているわけではありませんが、「友愛通信」で何度も書いていますように、子供たちはここでごがんばってりっぱに高校・大学を卒業し、社会で有用な人材として働いています。

A：そういう施設擁護というようなものは、この頃あまりマスコミには出て来ないよね。国策としての里親推進が始まって以降だけ。

B：実は、今回の事件について、ある新聞社の取材も受けました。その後、コロナ感染症が宮崎県内で爆発的に拡散しましたので、新聞はそっちの方ばかり追っていて、もう記事にはならないのかもしれませんが。私の印象としては、施設では愛着関係・信頼関係が築きにくいのではないかと（だから里親と言いたいのですが）、という不信感があるように思います。記者の不信感というより、関係者を取材しての意見の集約なのかもしれませんが、私は次のように主張しました。

施設の職員は一緒にフロに入ったり、添い寝したり、愛着関係作りには色々とエネルギーを使っています。そのKという女性は、施設で高校まで卒業しています。被虐待児童は思春期に荒れるケースが多いのですが、しっかりした支え（愛情）があったから高校を卒業できたのだと思います。被虐待児童を里親にあずけた場合、どういう展開になるか想像してみてください。親が里親宅に怒鳴り込んでくることも考えられる。そうしたら、里親さんはいっぺんに燃えつきてしまいますよ。また、先に言ったように思春期に荒れることもあります。施設の場合チームで対応しますので、一人の担当職員がバーンアウトしても、次の職員を準備できますが、里

親さんは素人であり、対応できなくなるでしょう。ケースバイケースで、施設と里親さんとが、協力し合って、このような社会的養育・養護は組み立てられていかねばならないのです。里親さんだけで虐待問題に対応できるわけではありません。

A：高校卒業までしっかり支援したということだから、その施設を責めることはできないよな。卒園後のアフターケアはどうなのだろう。

B：アフターケアは、私たちにとって重要課題です。これについては、私たちも大いに反省しなければなりません。今年度延岡に大学生専用の自立援助ホームを作りました。6名定員で現在、大学生が5名入所しています（3名措置、2名私的契約）。大学に合格したらゴールではなく、卒業まではしっかり支援していく体制を作りました。高卒後の就職生についても、社会人になって困った時、「助けて」と言える関係を維持していかねばなりません。担当していた職員たちとつながっているケースが多いのですが、落ちこぼれが出ないようにシステム作りが必要です。特に女性の場合、難しいです。今回の事件は他人事ではなく、親が頼れないケースが多いだけに、配慮が必要です。現在、子供2人抱えた卒園生（母子）に、小規模児童養護施設の近くに住んでもらい、いつでも駆け付けられるようにしているケースもあります。

A：施設なりに色々と努力していることがよく分かり安心しました。世間の人たちは、マスコミが報道する以上にはわからないので、できるだけアピールしていくことが必要だと思うよ。

グローバル化の世の中で、社会的養育・養護の世界も、欧米のように里親推進で突っ走り始めているけれど、日本の児童福祉施設の必要性もしっかり訴えていかねばならないね。

B：5年後10年後を考えながら、今「子どもの未来を守る会」による「日本の福祉文化と子どもの未来を守るための要望書」の署名活動を続けていますが、引き続き、御協力をお願い致します。先ほどAさんが「日本人が長い歴史の中で培って来た生活文化」と言われましたけど、私たち施設現場の人間も、先人たちが築いて来た福祉文化を拠り所としながら、しっかり子供たちを養育・教育していきたいと思います。アメリカは常に日本にとっては模範であり目標でしたが、今回のコロナ感染の実態を見る限り、その生活文化は模範ではありえないと実感できています。日本の生活文化・福祉文化の良さもしっかり訴えていかねばならないと思います。ありがとうございました。コロナに感染したら、私たちの年代は即天国行きとなりますので、互いに気をつけましょう。